

3
大書 小国 330

重松鷹泰 監修

しんがぎ

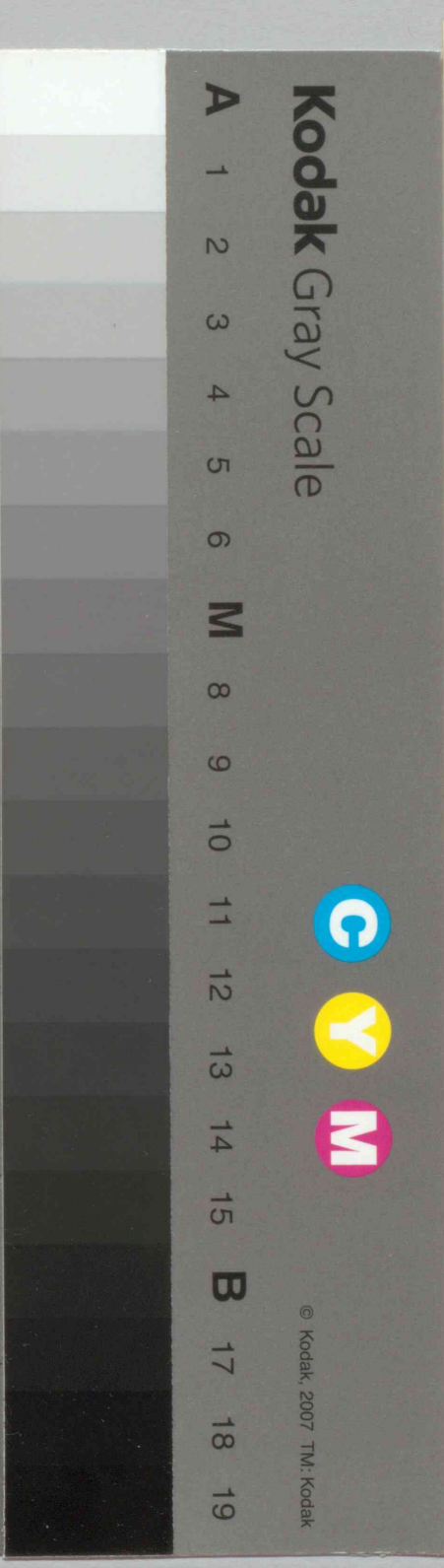
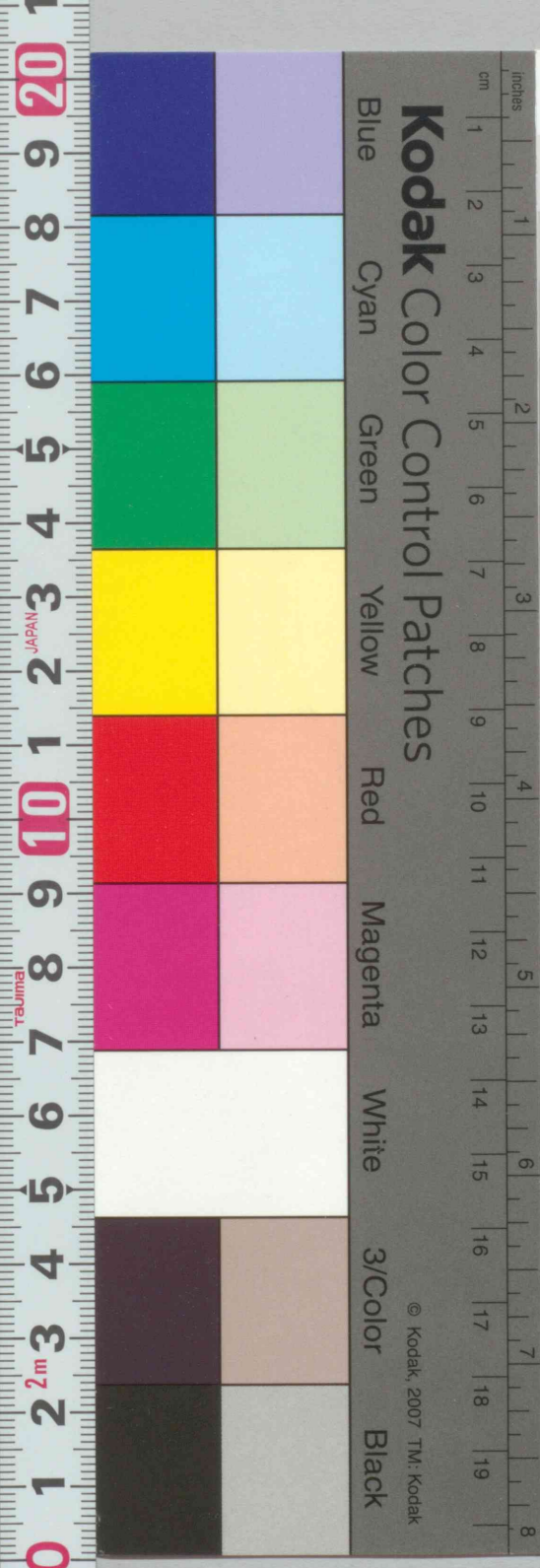
小学国語

三年下

教育部
資料室
文部省検定済教科書



教科
34
013



60352
教科書文庫
6
810
74-1950
01304
49883



昭和 25 年 8 月 12 日 文部省検定済 小学校国語科用

寄 贈

し ら さ ぎ

小学国語 三年下

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449883

広島大学図書

0130449883



広島大学
教育学部図書

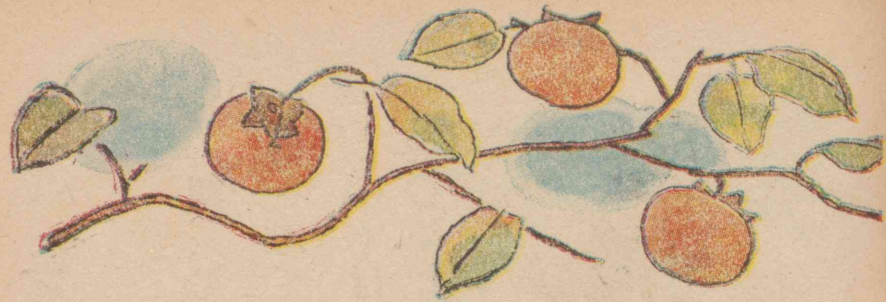
大阪書籍株式会社

中央図書館

広島大学図書

0130449883





もくろく

一 かべ新聞

(一) 新聞屋さん

(二) 新しい計画

(三) かべ新聞

二 しらさぎ

(一) ぼくにも書ける

(二) 詩のポスト

(三) しらさぎ

4

12

20

53

58

61

三 汽車のまど

(一) いなかから

(二) 汽車のまど

(三) 牛の赤ちゃん

四 光の星

(一) 光の星

(二) 金のおの銀のおの

五 私のけいこ

68

72

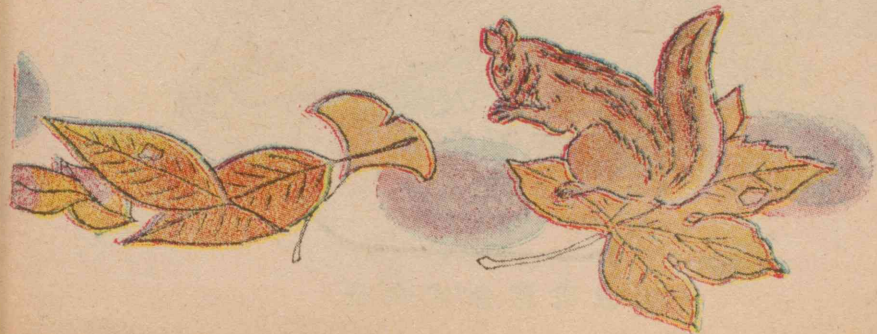
84

93

105

121

新しいことば
かん字



一かべ新聞

(一) 新聞屋さん

朝、だれよりも早く、げんかんにやってくるのは、新聞屋さんです。



ぼくは、毎朝、新聞を取りにげんかんへ出ます。しかし新聞屋さんが、いつごろやってくるのか、見たことがありません。早く起きたと思う朝でも、ぼくが新聞受けのところへ行くころには、もう、新聞屋さんはどこかへ行ってしまっています。

でも、ついこの間から、新聞屋さんの元気なすがたを見かけるようになりました。それはぼくにも、子ども新聞がとってもらえるようになったからです。

ぼくはときどき、おとなの新聞を見ることがありますが、字やことばがむずかしくて、なかなか読めません。おとうさんやおかあさんのように、新聞がすらすら読めて、その話ができたら、どんなにおもしろいことだろうと思っていました。

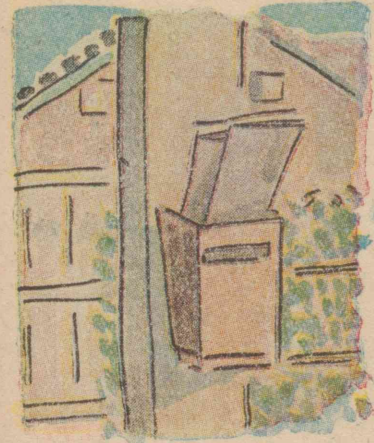
ある晩、夕ごはんのあと、おとうさんが新聞を読んでいたのを見て、ぼくがその横からのぞいてみると、おとうさんは、

「おや、おまえも新聞を読みだしたのかね。そうだ。毎朝新聞を取りにいつてくれるから、そのほうびに、子ども新聞をとってあげよう。」とおっしゃいました。

それから二三日たった朝、げんかんに行ってみると、新聞受けには、おとなの新聞と子どもの新聞とが、二まいはいっていました。

それからというものは、ぼくは、毎朝ぼくの新聞の来るのが待ちどおしくてたまりません。

もう来るなど思いかけるとたま



りません。思わず、ねどこから、とび起きてしまいます。

服にきかえていると、げんかんから、チリンという、じてん車の音といっしょに、バサツという新聞のおちる音も聞えてきます。

ぼくがげんかんに走っていくと、新聞屋さんは、もう、二けんも先の家へ新聞を入れるところでした。じてん車にのつたまま、かた足を地について車をとめ、荷物台の上からするりと新聞をぬいていきます。じてん車のハンドルがかたむく時に、ベルがチリンとなります。

新聞屋さんは同じようにして、つきからつきへと新聞をくばっていくうち、ずつとむこうの四つつじから右に折れ

て、すがたが見えなくなってしまいました。

ぼくは、新聞受けから新聞をぬきとると、しばらく、げんかんに立ったまま読みます。新聞を見ていると、なんだかおとなになったような気になります。

新聞をひろげると、新聞の新しいインクのおいが、ふんどにおいます。学校でもらうすりもののおいとは、少しちがうようです。

ぼくはこのにおいがすきです。においがかいでいると、頭がすがすがしくなってきました。



ぼくには、朝は、まず新聞にのってくるようにさえ思われます。

つぎの朝は、まだ新聞ははいつていませんでした。

げんかんに立って待っていると、やがて、新聞屋さんがやってきました。

「おじさん、おはよう。ぼくの新聞ありがとうございます。」

と、ぼくがいうと、おじさんは、

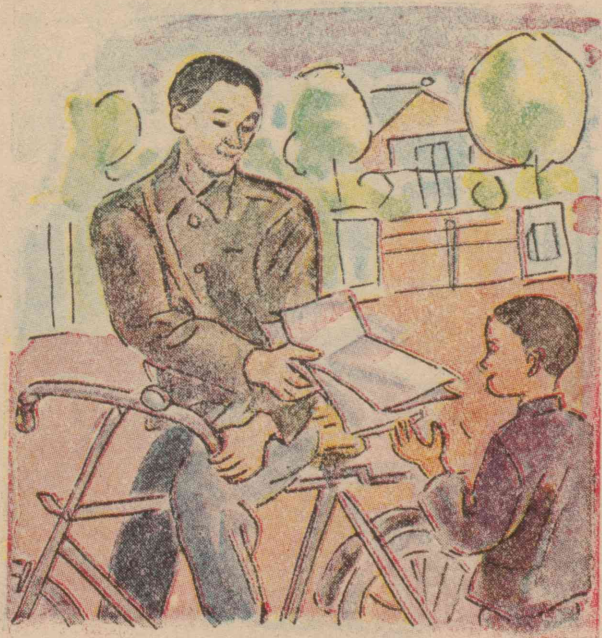
「ああ、おはよう。ずいぶん早いのですね。ぼっちゃんの新聞も、はい。」

といいながら、にこにこして、新聞をわたしてくれました。

「おじさん、まだどのくらいくばるのですか。」
とたずねると、

「もう、あと五十けんばかりですよ。みんなで二百けんほどですがね。なあに、一時間半ですみますよ。それではもうひと走りしてきます。」

とわらいながら、となりの家へ、じてん車をおしていきました。



いったいおじさんはいつごろ起きてくるのだらう、それに、毎朝遠くの町や村にまで、くばっていくのは、たいへんなことだらうと、ぼくは思いました。

ぼくのとっている新聞は、字も大きくてやさしく書いてあります。めずらしい絵やしゃしんや、いろいろな文が、たくさんのせてあります。それらが、毎日、新しくかわっていくのですから楽しみです。

ぼくは、ふと、学校で、こんな新聞を友だちといっしょに作ってみたいと、思いました。

(二) 新しい計画

1

二学期になって、学級の係がかわりました。

きよしくんたち五人は、記ろく係になりました。

先生は、

「一学期の係の人たちは、学級のために、それぞれいいしごとをしてくれました。こんどきまった係の人たちも、いいしごとができるようにしてほしいものです。この時間は、係ごとに集まって、係のしごとを新しく計画することになりました。」とおっしゃいました。

記ろく係のものは、きよしくんのつくえのまわりに集まって、相談をはじめました。

あいこ「夏休みの作品を、早くかたづけしてしまわないといけないわ。」

よしお「みんなとりはずしてしまおうと、後のけいじ板やかべが、急にさびしくなってしまうよ。よくできた絵や、作文



や研究は、もっこのこしておきたいね。」

まさこ「けいじのし方を、もつとくふうしてかえてみたら
どうでしょう。」

すすむ「そうだ。後のけいじ板や、かべ一面に、みんなの
作品をかざりたいね。そうすると、みんなが発表
できていいと思うのだよ。」

きよし「いい考えがある。それはみんなの作品を集めて新
聞を作るのだ。」

よしお「あのふつうの新聞をかい。」

きよし「いや、ふつうの新聞では小さすぎるから、すすむ
くんのいうように、後のけいじ板や、かべを一つ

の大きな新聞のかべにする。そうして、そこへみ
んなの作品をそのまま、うまくはりあわせたら、
どうだろう。」

みんなは、きよしくんの考えにさんせいしました。そこ
で、まず、先生にこの計画を話しました。

先生は、

「後のけいじ板や、かべを新聞にするのだね。それはおも
しろくていい考えだ。ひとつやっpegらんなさい。」
とおっしゃいました。

ほかの友だちもみんなそろって、

「さんせい。」

と行って、手をうちました。

そこで、きよしくんたちは、新聞の作り方や、のせる作品について、いろいろと相談を続けました。そうして、まとまったことを、つぎのように小黒板に書いて、みんなに知らせました。

かべ新聞にのせるもの

みじかい文、お知らせ、わらいばなし、

ことばあそび、読んだり聞いたたりした話、

作った童話、作文、研究。

そのほかおもしろくてためになるもの。

2

いろいろな作品が、記ろく係の

ところへ集まってきました。

きよしくんたちは、学校が終っ

てから、教室にのこって、かべ新聞を作りました。

集まった作品をより分けて、ピ
ンでとめていきました。けいじ板
のあいているところには、カッ
ト
や、かぎりも入れました。

運動場で、あそんでいた人たち





「さあ、おそくなるとい
けないから、お帰り。
ごくろうさんだったね。」
と、先生がおっしゃった
ので、五人は、まどをし
めて帰りました。
かいだんをおりていく
五人の軽くはずんだ足音
が、長いらうかのはしか
ら聞えてきました。

のにぎやかな声も、だんだんしずかになり、あちらこちらのまどをしめる音が、高くひびいてきました。
あいこさんが、はなうたを歌いだしたので、それにつられて、めいめいかってな歌を歌いはじめました。だんだん声が大きくなったので、みんな一度にわらってしまいました。
た。

「おや、まだのこっていたの。やあ、できたね。りっぱにできた。あす、みんなが来るとびびっくりするよ。」
とおっしゃって、先生もうれしそうでした。

西日が教室にななめにさしこんで、かべ新聞をあかあかとてらしました。

(三) かべ新聞

◇ みじかい文

まっ白な雲、でんせんの上を走って
いる。
(まさこ)

中庭の池、こうしゃがうつっている。

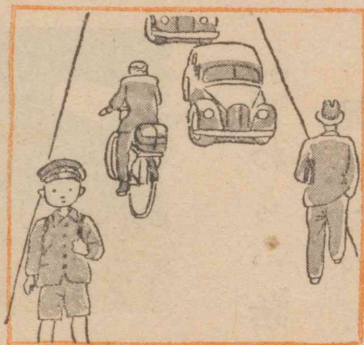
風がふくたび、こうしゃはのびたり、
ちぢんだりしてゆれる。
(まもる)

とりのこされた赤いかきの実、ねず
み色の雲にういている。
(たかし)

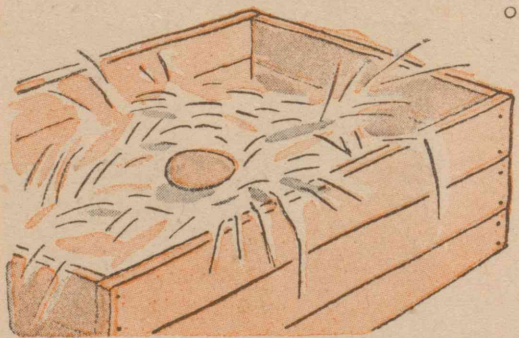


◇ お知らせ

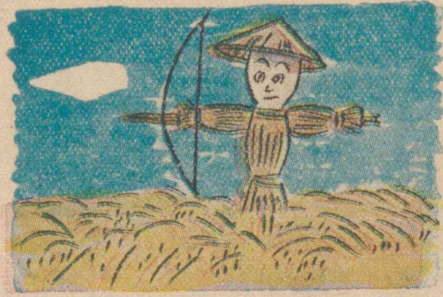
町では、来週の月ようから、「こうつ
うあんぜん週間」が始まります。学校
では、そのポスターをかい、けいさつ
に出すことになりました。



学校のにわとりが、はじめてたまごを
生みました。細くて、もも色がかつたた
まごです。まだ小さなたまごです。これ
から、とり小屋のけいじ板に、たまごの
数と、生んだ日を書きます。



◇ ラジオで聞いた話



二百十日もぶじにすんで、今、いなかのいな田には、こがねの波がうっています。お百しょうさんたちは、ことしはほう年だといって、よろこんでいます。村のちんじゅの森から、たいこの音が聞えてくるのも、もうすぐです。

◇ わらい話

兄 「朝日と夕日と、どっちが重いか知っているかい。」
弟 「夕日だよ。」

兄 「どうして。」

弟 「夕日はしずむし、朝日はのぼるから。」

姉 「手に、こんなしわがよって、いやだわ。」

妹 「しわなら、アイロンをかけてのばしたら

いいじゃないの。」

たろう 「ちきゅうに一ばん近い星

は、なんという星だろう。」

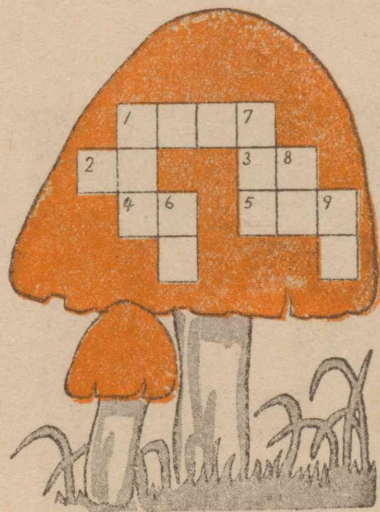
じろう 「それは、ものほしだよ。」



◇ クロスワード（たて横にくみあわせることば）

横のかぎ

- 1 秋の山にはえるたべもの。
- 2 家をあけて出ること。
- 3 米のできる植物。
- 4 木の実でとげのついてい
るもの。



- 5 かみの毛をかってそろえる店。
- 6 海のはんたい。
- 7 けの糸。

たてのかぎ

- 1 寒い時や、ちりやごみの多い
時、口にあてるぬの。
- 8 ねずみをたべる動物。
- 9 草や木がしげって、た
くさんはえている所。

◇ 考えもの

- けずればけずるほど、大きくなるものなあに。
- 顔を見ないで話すものなあに。
- うしろへ引くほど勝ち、前へ進むほど負けるものなあに。

私はなんでしよう。

- 1 私は海の中にいました。
- 2 動物でも、植物でもありません。
- 3 人間は、私が必要ならば生きていくことができません。
- 4 私は白い色です。
- 5 水の中に入れると、よくとけます。

◇ なぞなぞ

ラジオとかけて、なんととく。

秋の花畑。　　こころは、きくばかり。

すずとかけて、なんととく。

かみなり。　　こころは、ふればなる。

◇ ふくびき

秋のもみじ——これにあたった人には、はみがきこをあ
げます。秋は、はが美しくなるからです。

こおりのてんぷら——これにあたった人には、何もあげ
ません。あげられませんから。

◇ 読んだ話

しか

(イソップ物語)

一匹きのしかが、水をのもうと
思って、森の中の池にやってきま
した。水の上に、じぶんの美しい
すがたがうつりました。

しかはしばらく、じぶんのすが
たに見とれていましたが、長い角
が、あまりみごとなので、じぶん
の角でありながら、すっかりかん
しんしてしまいました。



「ああ、ぼくの角はなんとりっぱなのだろう。ぼくのような角を持ったものは、この森にも、いや、世界中にもいないだろう。」

しかは、こんなひとりごとをいいながら、にっこりしました。ところが、そのうち、ぎんねんなことに気がつきました。それは四本の足です。ひよろひよろして、いかにも弱そうな細長い足が、あのりっぱな角にくらべると、たいへんみにくく見えるのです。

「もっと太くて、強い足がほしいな。」
しかは思わずつぶやきました。
その時です。

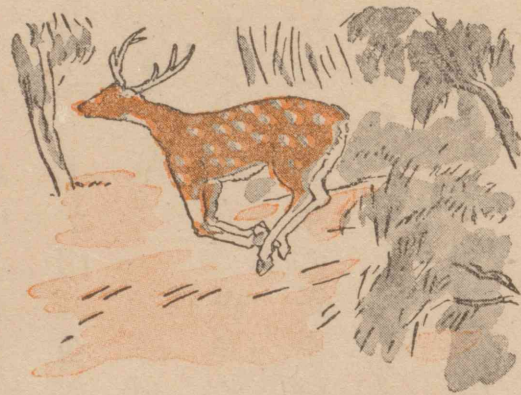


「ダーン。」

大きくなって、ぼうの音が、後の方でしました。しかは、びっくりして、いちもくさんに森の中へにげこみました。

はげしい犬のなき声が、聞えてきます。

細長い四本の足は、強く地面を
けて走りまわりました。ところが、や
ぶの中を通りぬけようとした時、
角が、木のえだや、つたにひっか
かって、なかなか通りぬけること
ができません。犬の聲が、だんだ
んと近づいてきました。



あわてればあわてるほど、角がえだに深くかかってとれ
ません。しかは、角をふりふり、ようやくやぶの中を通り
ぬけました。

森をぬけて、やっと山のふもとにきた時、息をはずませ
ながら、四本の足をなでました。そうして、しかは、つく
づく考えました。

細くて弱そうな足が、ほんとうは強くてたいせつだった
こと、また、どんなにりっぱであっても、角はこんな時に
は役にたたず、かえって、じゃまになるものだということが
わかりました。

その時から、このしかは、美しい角をじまんしたり、弱
そうな足を、かなしく思ったりしなくなりました。

読んで思ったこと

- 一 じぶんのいいところをじまんしたり、人にくらべて、
おとっていることをかなしんだりしないようにしたい。
- 二 このしかが、じまんすることは、よくないというこ
とに気がついたのはよかった。
- 三 ちょっと見て、いいとか、わるいとかをきめるのは、
浅い考えだと思う。
- 四 私も、じぶんのからだをたいせつにしたい。

(きよし)

◇ 童話

ばらとつゆくさ

(よしこ作)

ある家の庭のかき根にそって、まっかなばらがさいていました。その下には、小さなつゆくさの花がさいていました。

ある日、学校帰りの子どもたちが、通りかかっていきました。

「やあ、きれいな花だな。」

「どの花よりも美しい。」

「一つほしいわ。」

これを聞いたばらは、すっかり、とく



いになり、えだをのばして、うれしそうにからだをふるわせました。すると、一つのえだが、下にさいているつゆくさの花にあたりました。

「いたい。」

と、つゆくさは思わずさげびました。ばらのとげがささったのです。

「まあ、なまいきね。わたしのようなりっぱなものに、口ごたえするなんて。」

ばらはこういって、もう一度、とげをあてました。

つゆくさはがまんしきれなくなって、なみだを、ぽろりぽろりとこぼしました。そうして、小さな声で、

「ごめんなさい。」と、あやまりました。

ある日、ばらはつゆくさにいいました。

「つゆくささん。あなたに聞きたいことがあるの。あなた
は一度でも、このうちのおへやをかぎったことがありますか。
いったいなんのために花をかぎさせているの。役に
立たない花は、花のなかまではないわ。」

つゆくさは、じぶんがみすばらしいということ、よく
知っていました。が、こいわれると、一度に、くやしなみ
だがこぼれました。

そこへ、この家の女の子が、みけねをだいてやってき
ました。

「あら、こんな所に、かわいい花が
さいている。青むらさきの花なん
てめずらしいわ。わたしのへやに
かざりたいわ。おかあさんにも知
らせてあげよう。」

といいながら、走っていきました。

あとにのこったみけねは、ばら
の花に、じゃれはじめました。赤い
はなびらがおちて、足でふみにじら
れました。ねこはまたとびつきまし



た。ばらの花びらは、三まい、五まいとかきなっておちました。ところが、どうしたことが、みけねこは、どきりと地の上にくろげました。ばらのとげがさきったのです。

女の子が、おかあさんの手をひっぱってかけてきました。

「あれ、たいへん、みけが。」

といって、女の子はみけをだきあげました。

「どうしたというの。」

「おかあさん。みけの足にとげがきさっているわ。かわいそうに。このばらのとげよ。にくらしいばら。」

女の子は、ばらのとげをぬきとりました。そうして、

「おかあさん。とげのあるばらよりも、この花の方がかわ

いらしいわ。」

と、つゆくさの花をさしていいました。

「ああ、この花ね、つゆくさというの。おかあさんも大すき。おとうさんが野原から取ってきて、お植えになったものよ。」



「わたしのへやにかざりたいわ。」

「そうしなさいよ。おとうさんもおよろこびになるわ。」

こうして、つゆくさは女の子の手につまれました。

ばらはその後、ときどきあのとげをつゆくさにあてる
ことがありました。けれども、つゆくさは、じぶんもりっ
ぱに役にたつことがわかってからは、じつとがまんをして
いました。

日ではその後、長く続けました。庭の土は、からから
にかわいて白くなっていきました。ばらは、のどがかわい
て、だんだん苦しくなってきました。花も葉も、ぐったり
としおれてきました。つゆくさは、ふだんから花にも葉に
も、いっぱいつゆをためていますからこまりません。青む
らさきの花は、いつも、みずみずしい色にかがやいていま
した。そうして、ばらがため息をつくたびに、ためていた

つゆを、たくさんその根もとにおとしてやりました。

やがて、雨の日がきました。ばらは、やっど、息だけは
ふきかえしましたが、たくさんな花や葉をうしなえました。
つゆくさは、思うぞんぶん、雨のしずくをすいこみました。
生きのこったばらは、そつと頭をさげていきました。

「つゆくささん。こうして助かったのも、みんなあなたの
おかげです。これまでのいじわるを、ゆるしてくださる
かしら。」

「いいのですよ。よかったわ。」

つゆくさは、うれしそうに答えました。

研究

ふくらむ物とちぢむ物

(ひろこ)



この前の日よう、えん先で、赤ちゃんのおもりをしていた時でした。

赤ちゃんは、セルロイドで作ったこいのおもちゃを、ころがしたり、だいたりして遊んでいました。しばらくすると、こ

いのおなかが、ぽこんとひっこんでしまいました。

「おかあさん、おもちゃがだめになったわ。」

とって、お見せすると、おかあさんは、

「あら、こまったね。なおせないかしら。」

とおっしゃいました。

そのばん、おかあさんがおふろにはいられる時、

「ひろこ、さっきのこいを持ってきてごらん。」

とおっしゃったので、私は、「あんなにひっこんだのを、

どうなさるのだろうか。」と思いつつ持っていくと、おか

あさんは「ふくらまないかしら。」といいながら、こいをゆ

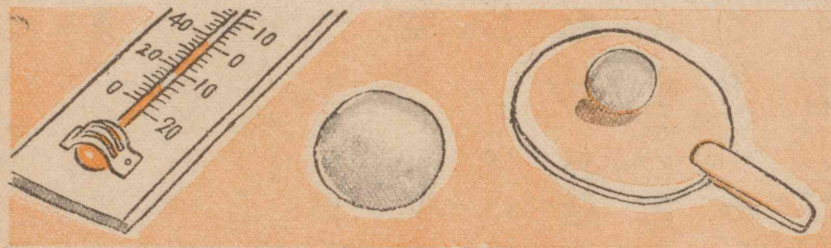
の中へ、おつけになりました。しばらく、しずめていらっ

しゃると、すっかり、もどおりになったこいが、ぽか

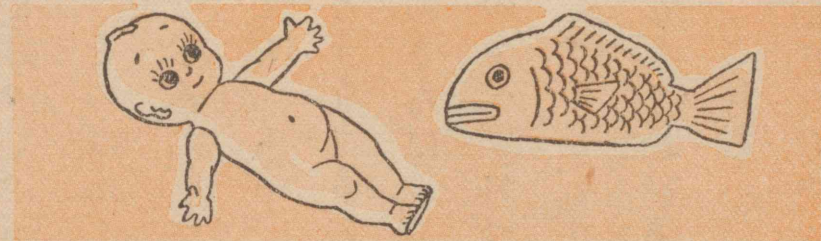
んと、うかびあがりました。おかあさんは、

「これでいいでしょう。」

とって、おわらいになりました。



とおっしゃいました。
「ピンポンの玉——それから。」
といったまま、私はつまってしまいました。
おかあさんは、
「それからね、ゴムまりのひっこんだのや、
かんたん計の、アルコールや水銀の切れ
たものなどもなおせます。」
と、教えてくださいました。
私は、あたたかくなると物がふくらむと
いうわけが、まだ、よくわからなかったの
で、もう一度、おかあさんにお聞きすると、



「どうしたの。」
「なんでもありません。おゆにつけただけよ。」
「ふしぎね。どうしてふくらんだの。」
「セルロイドがあたたまったので、中の空気が
ふくれて、ひっこんだのをおしだしたの。」
おかあさんが、よくお考えになっているの
で、私は感心しました。
お風呂からあがられたおかあさんは、
「ひろこ、おふろのゆで、セルロイドのおも
ちゃのようになおせるものは、外にもあり
ますよ。考えてごらん。」

横にいらっしゃったおとうさんが、

「夏になると、よく、じてん車のチューブがパンとってはじけるだろう。あれも暑さのために、チューブの中の空気がふくらんで、チューブの弱いところをおしやぶって、空気が外に出るからだよ。」

とおっしゃいました。

私は、お話を聞いている間に、ふと、ぎぶとんを日のおたるところに出しておくど、ぎぶとんが、あたたかくなって、ふくらんでいるのを思い出しました。

私は、あたためられるとふくらむものを、しらべてみようと思いつきました。

そうして、おとうさんや、おかあさんに教えてもらったことや、考えついたものを、つぎのように、研究のノートに書きこみました。

ゆでふくらむもの

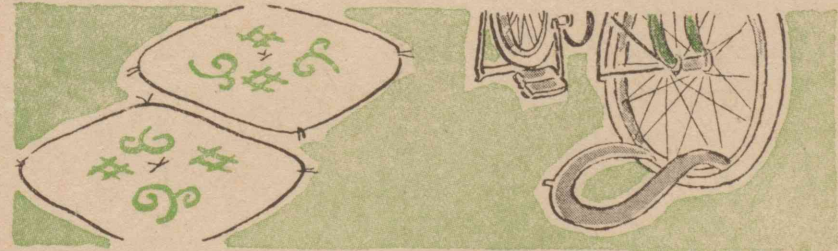
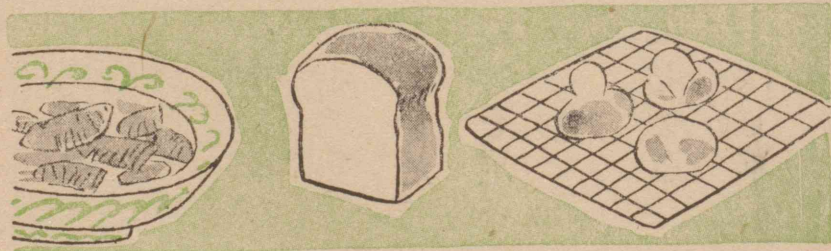
ゴムまり セルロイドのおもちや

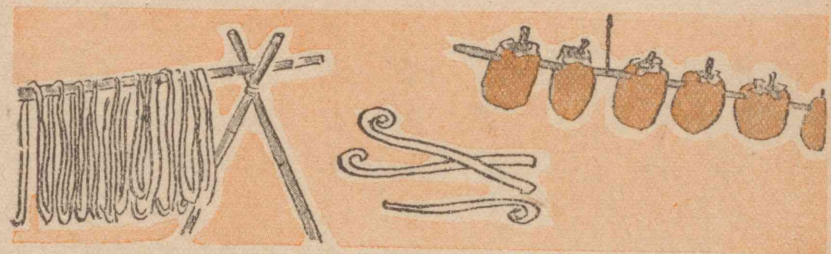
火でふくらむもの

もち かきもち パン せんべい

水でふくらむもの

まめ 種 かずのこ



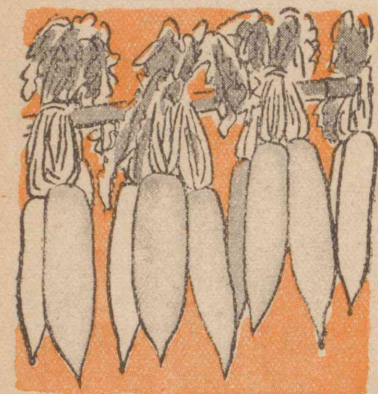


日の光でふくらむもの
 ゴムまり ふとん

日の光でふくらむ物を考えている時、日の光にあたると、ふくらむよりは、かえって、ちぢむ物がたくさん頭にうかんできました。それで、こんどは、日の光でちぢむ物を思いだして書きました。

わらび だいこん きりぼし ほしがき
 いも いものつる かんぴょう ほし草

つぎには、こんな物が、どうしてちぢむのだろうかと考えてみましたが、ふと、二年生の冬休み、つけものにするだいいこんらいのお手つだいをした時のことを、思いだしました。だいいこんをほす前に、めかたをはかると、七十五キログラムあったのに、十日間ほしてはかると、六十キログラムになっていました。その時、おかあさんが、



「十五キログラムもの水分が、出ていったことになるね」といって、教えてくださったのでした。日の光でちぢむのは、こうして、水分がかわいて出ていくのではないかと思いました。

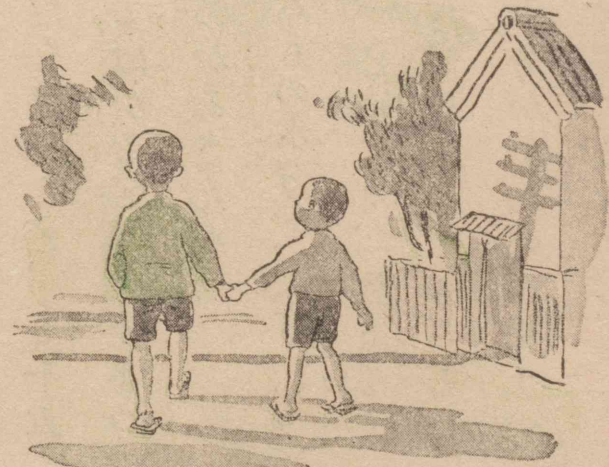
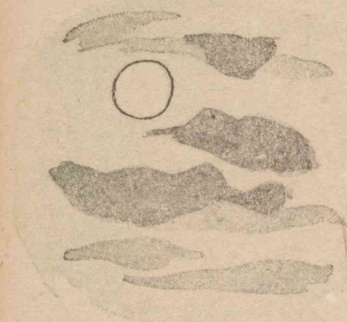
□作文 月の晩

月のあかるい晩であった。
ぼくは弟とふたりで、おかあさんを
むかえに、月にてらされた道を歩
いていった。

電信柱の長いかげが、おびのよう
になって、道を横ぎつていた。そう

して、白く光った
くらのかべに、うつっていた。ぼくと弟
とは、そのかげをまたいで通った。

山ぎわの道にさしかかると、あたりの



木や、やぶは、みな同じ銀色に光っていた。道にうつった
木のかげには、太いひもあるし、細いひもある。首を
長くのばしたうさぎもいる。あみにひっかかった魚もいる。
へびもいる。それが、じっと下から、ぼくたちを見上げて
いるようだ。

とつぜん、弟が、

「にいちゃん、もう帰ろう。」

といいだした。ぼくは、

「もう、おかあさんもお帰りだから、向ここの電信柱まで
行ってみよう。」

といいながら、弟の手を引いてかけだした。

すると、弟は、

「にいちゃん、月はぼくたちよりも早いね。」
といった。

なるほど、月はぼくたちの前について、少しもはなれな
いで光っている。月を見上げて歩く弟のかおが、白く見え
る。しばらく行くと、月は山の黒いすぎの木にとまった。
急にくらくなって、なにかにかこまれてしまったような気
がしてならない。後にある、ぼくたちの黒いかげだけが、
地面に長くはっている。ぼくは、思わず弟の手をぎゅつとに
ぎりしめていた。

その時、坂の上から、黒いかげが二つあらわれた。そう
して、だんだんこちらへのびてくる。

ぼくは、ぎゅつとして立ちどまった。

弟はなんと思ったか、

「おかあちゃん。」

と、大声でさげんだ。

「おかあちゃん。」

と、山びこがいった。

「はあい。」

おかあさんの声だ。

「はあい。」

山びこもいう。



弟は、ぼくの手をふりきつて、「かけていった。」

二つのかげは、おかあさんとよしむらのおばさんだった。四人になって、急ににぎやかになった。

弟は、大きな声で、

「おかあちゃん、くりは。」

と、いって、もうおみやげをねだっている。

月の光が、前よりも強くなったように思われる。道ばたの草には、もう、つゆがおりて、きらきら光っている。

「ころころ、ころころ。」と、こおろぎもなっている。その声は、月から聞えてくるように思われた。

(いちろう)

二 しらさぎ

(一) ぼくにも書ける

秋ばれの運動場には、あかるい日の光がさしていました。きよしくんは、友だちといっしょに遊んでいましたが、ふと、みんなのかげが、地面や、かべにうつって動いているのに気がつきました。きよしくんはおもしろくなって、いろいろなかげを作って遊びました。

そうして、こんなことを、後でノートに書きました。

ぼくが走ると、

かげも走る。
ぼくがかくれると、
かげもかくれる。
のぞくとかげものぞく。
ぼくがぼうしをかぶると、
かげもかぶる。



まさをくんは、学校から帰ってから、きよしちゃんと山へくり拾いに行くことにしました。
きよしくんの家へ行くと、庭先でせんたくをしていらっしやっ。たきよしくんのおかあさんが、

「今ちょっとお使いに行きました。もうすぐ帰りますから待っていてくださいいね。」
とおっしゃいました。まさおくんは、おばさんのせんたくを見ながら、きよしくんの帰るのを待っていました。その時、こんなことを見つけました。

あわに、
けしきが
一つ一つうつつている。
きものをしぼると、
うすねずみ色の水がおちてくる。



○
あいこさんは、うさぎどう番でしたから、うさぎ小屋へ
行きました。

うさぎは、あいこさんが近づくと、耳を立ててこちらを
見ました。あいこさんは、その時のようすを、手ちょうに
書いておきました。

うさぎは耳を立てて
私の方をじっと見ている。
風がふくと、
その目が細くなる。



○
国語の時間のはじめに、きよしくん、まさおくん、あい
こさんは、この間から、ノートや手ちょうに書いておいた
文を読みました。

みんなは、耳をすまして聞きました。

先生も、にこにこして、お聞きになっていました。が、
「三人とも、よく見える目を持っています。詩はこうして
生まれるのだね。」

と、おっしゃいました。するとだれかが、
「ああ、それなら、ぼくにも書ける。」
と、いいました。

(二) 詩のポスト



このごろ、みんながさかんに詩を書きだしました。だれのポケットにも、小さな詩のノートがはいつています。

ある朝、教室にはいると、入口の柱に、青くぬったポストがかかっています。よく見ると、ポストの口の下には、「詩のポスト」と、黒色できれいな字が書いてありました。

みんなは、ぞろぞろと、「詩のポスト」のまわりに集まりました。

「これはなんででしょう。」

「だれが作ってきたのでしょう。」

「字のじょうずな、あいこさんにちがいないわ。」

「いや、工作のじょうずなきよしくんだらう。」

「でも、すこしりっぱすぎるね。」

「あ、そうだ。先生が作ってくださったのだよ。」

「そうだ、そうだ。」

「このポストは何にするんだらう。」

めいめい、かってなことをいいながらさわいでいるところへ、先生が、おいでになりました。

「ああ、みんな気がついたかね。それでは、この『詩のポスト』についてお話をしましょう。みなさんは、このご

ろたいそうねっしんに詩を書いてきます。そこで、これからは、このポストの中へ詩を入れてもらって、ときどき発表会をしたらいいと思うのです。」
みんなは「うれしい、うれしい。」といって、手をたたきました。

四五日すると、詩のポストはいっぱいになりました。そこで、さっそく発表会を開くことになりました。そうして、いろいろと思つたことをのべあいました。

(三) しらさぎ

しらさぎ

しずかな朝に、

しらさぎが

山の方からおりてきた。

ハンカチのように

まってきた。

池のふちへ、

そっと

おりてきた。



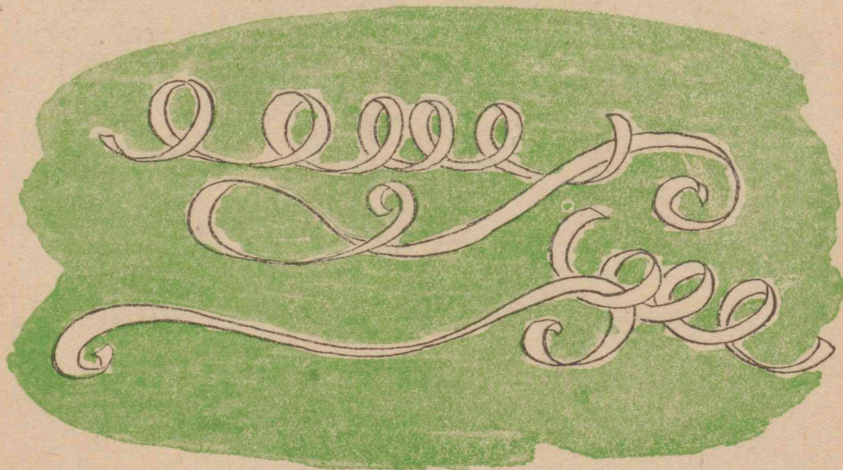
さんま

さんまをやいた。
火がきつくなった。
青い火、ぼーという音。
かじのような明かるさ。
さんまのせなかから、
うずまきのようなあわが
ぶつぶつ出ている。
このさんまは、
あぶらがきついな。



だいくさん

だいくさんが、
かたそうな木をけずっている。
シューという音がして、
かんなくずが
長いひもになって出る。
その先がぐるりと、わになって、
だいくさんの足もとにたまる。
木のおいがふんとする。
ふわふわしたかんなくずの上に、
すわってみたくなる。



さぎんか

ひっそりとした

お寺の庭を歩いてみると、

風もないのに、

さぎんかの花びらが

ちった。

うすい紙のように、

ひらひらとちった。

私は花びらをよけて

通った。

てのひら

いろいろなすじが

通っている。

どこかの地図のようだ。

てのひらのまん中に、

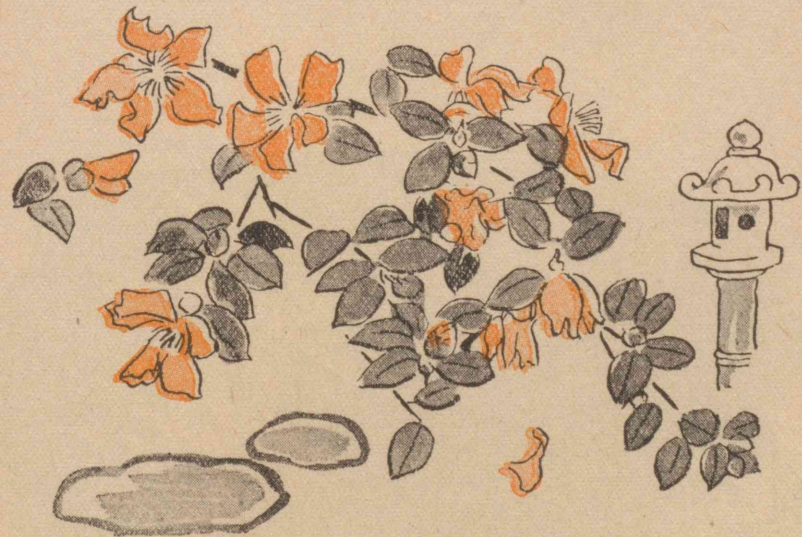
青いえのぐがついている。

そこを海にすると

おもしろいな。

島がせまくて

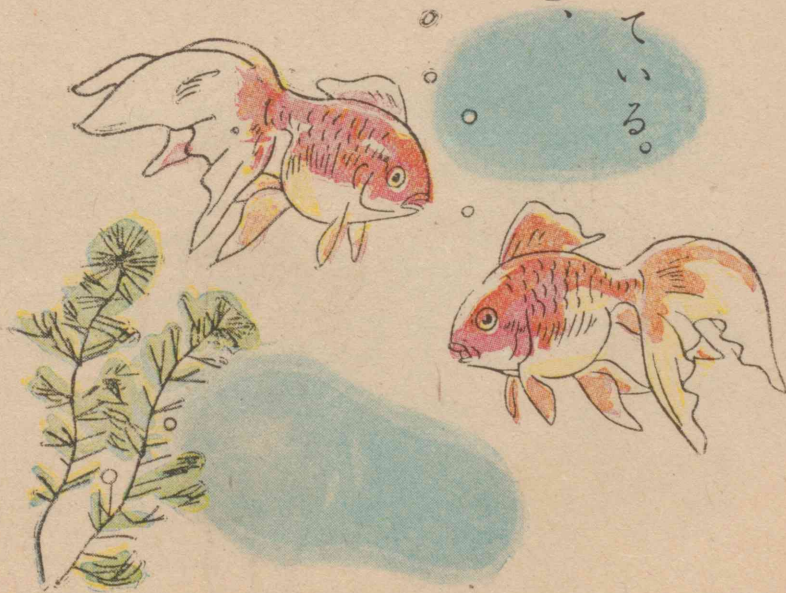
こまるだらう。



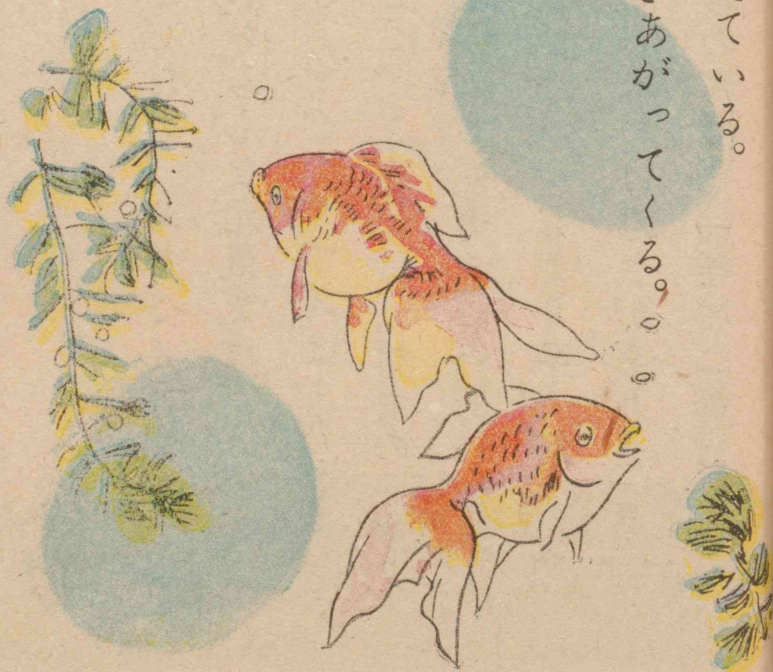
金魚

金魚がふをたべている。
一匹きだけがよくばってたべている。
横にいた金魚がよっていくと、
おびれでよけた。

二ひきの金魚が、
お話をするように、
つれだっておよいでいる。
どちらの口からも、
あぶくがぷくぷく出ている。



口をあけたり、とじたりしている。
おびれをふるわせて、うきあがってくる。
四つにわれたおびれを、
ひらひらとふる。
電とうの光で、
せなかがぴかぴか光る。
目をくりくりさせて、
はちの中をおよいでいる。



三 汽車のまど

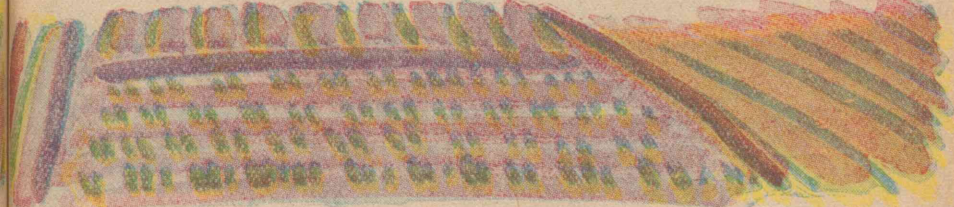
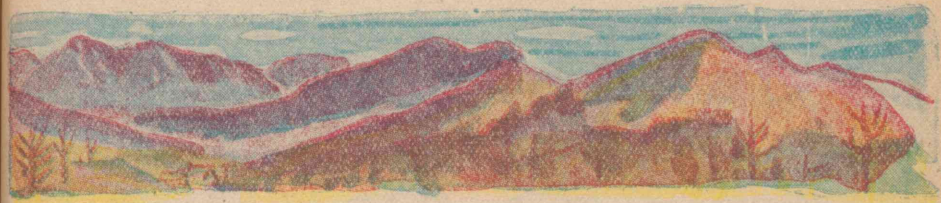
(一) いなかから

寒くなってきましたが、みなさん元気ですか。ぼくの家もみんな元気です。

秋の取り入れも、すっかりすみました。天気がよかった上に、ことしは、村中の人々がみんな力をあわせて、手つだいあいましたので、しごとはいつもより早く終わりました。この間、米のけんさがありました。ぼくのうちの米は、一等と二等ばかりでした。ここ、二三日の間に、駅前の米ぐらへ、はこんでいくことになっています。

ぼくのまいた麦が、元気よく芽を出しました。ときどき、みぞれがふってききましたが、麦の芽は平気です。それでも一面にしもがおりた朝などは、ちょっと弱っているように見えます。

ぼくは、学校から帰ると、おとうさんといっしょに、麦の横にたいひを入れます。たいひの中は、ゆげがたって、指を



入れるとあついくらいです。麦の芽に、たいひをかぶせてやると、麦の芽は、うれしそうにからだをふるわせます。来年もよい麦ができるようにと、心の中で思いながら、たいひを入れます。

牛が、もうすぐ、赤ちゃんを生みます。この秋は、赤ちゃんをおなかに持ったまま、よくはたらきました。いいちちがたくさん出るように、毎日、おとうさんとかいばを作っています。ことしは、さつまいももたくさん作ったので、そのつるを取って、山ほどつんでいます。その上に、秋のはじめ、ほし草をうんと作りましたから安心です。

ぼくは、いつごろ、牛の赤ちゃんが生まれるかなと思いつつながら、楽しんで待っています。

この冬休みには、ぜひ遊びにきてください。きみたちの来るころには、牛の赤ちゃんも生まれていると思います。おばあさんも「きよしさんやようこさんが、きつと、遊びに来るから。」といって、お正月のくしがきを、たくさん作っておられます。

ぼくも、お正月のくりをたくさん拾ってきて、庭のすみに、すなをいれてうずめています。

ようこさんといっしょに、きつときてください。今から待っています。

十二月十日

ひろし

きよしくん

(二) 汽車のまど

1

きよしくんとようこさんとは、冬休みになったので、いなかのひろしくんの家へ遊びに行くことになりました。

きよしくんは海のけしきが見たいので、電車から、海べを通る汽車にのりかえて行くことにしました。

ふたりは汽車のまどによりかかって、外のけしきにみとれていました。汽車のまどには、新しいけしきが、つぎつぎにうつります。まるで、えいがを見ているように思われました。

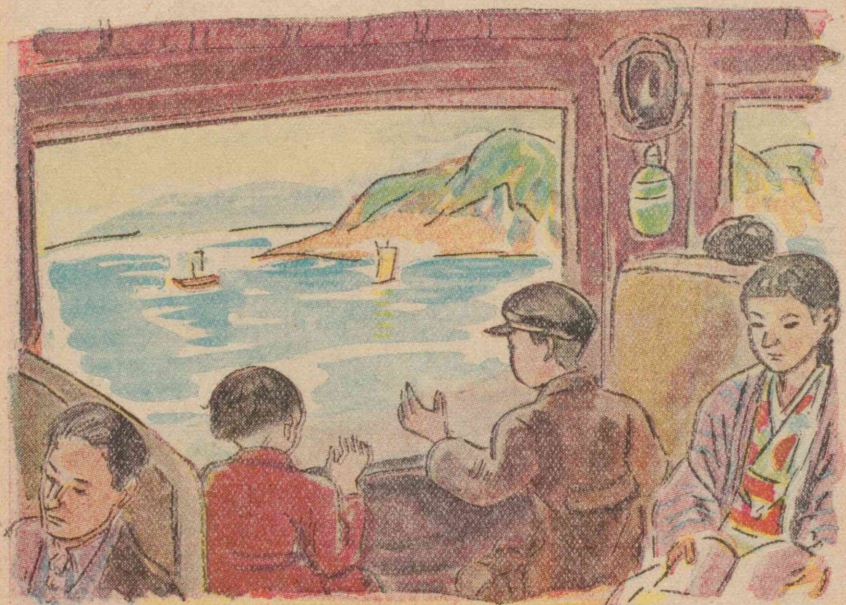
すると、今まで、がやがやと話しあっていた人たちが、

急にしずかになって、みんな外の方をむきました。

汽車が海にさしかかったのでした。

海が、まどいっぱいひろがって見えました。ちょうど汽船にのっているような感じでした。

きよしくんは、さっそく、ノートを出して、けしきのようすを書きとめていきました。





2

- 1 ガタン、ゴウゴウ、ガタン、ゴウゴウ。
汽車がレールの上を走る音。
- 2 「あ、海、海、海が見える。」
と、ようこのさけび声。
- 3 いそにくだける波、あわとなつてき
えたあとには、新しいすなはまが、
起きあがるようにきらきら光る。
- 4 岩にあたってとびちる波。
しぶきが、汽車の中までとびこむ。
- 5 風の強い、くもった空に、かもめが三



- 6 四わあがったりさがったりしてとぶ。
くろぐろとしたおきの海。しら波がつ
づく。魚とりに出かける船が五つ、六
つ。しらほに風をいっぱい受けてすべっ
ていく。船のへさきにも白い波がおど
りあがる。
- 7 空一面をおおったなまり色の雲。その
すき間から、日の光が、海のひととこ
ろを、やをいるようにさす。海上が、
かがみのようにちかちか光る。
- 8 海岸にならんだボート小屋。

色のうすれたボート。その下の
日だまりに、むしろをひろげて
遊ぶ子どもたち。

9 あみをほした船の下で、せっせ
と、あみをなおしているおじい



さん。

10 電信柱が、後へ後へとぶ。

家もとぶ。松林もとぶ。

11 松のえだの向こうに島がうかぶ。
島の家の上からかがやいて光る。

12 芽をきったばかりの麦畑が、く

ろぐろとつづく。

13 遠くはなれた海。おびほどに細くなる。

14 汽車の中がにぎやかになる。

新聞を読んでいるおじさん。

立って本を読んでいる中学生。

おかあさんのひざの上で、ち

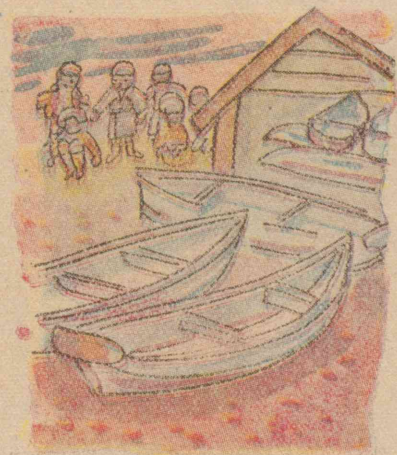
ちをのんでいる赤ちゃん。

りんごの皮をむいているおば

さん。りんごの皮が、ゆかに

つくほど長い。

こしかけの上に、きちんとす



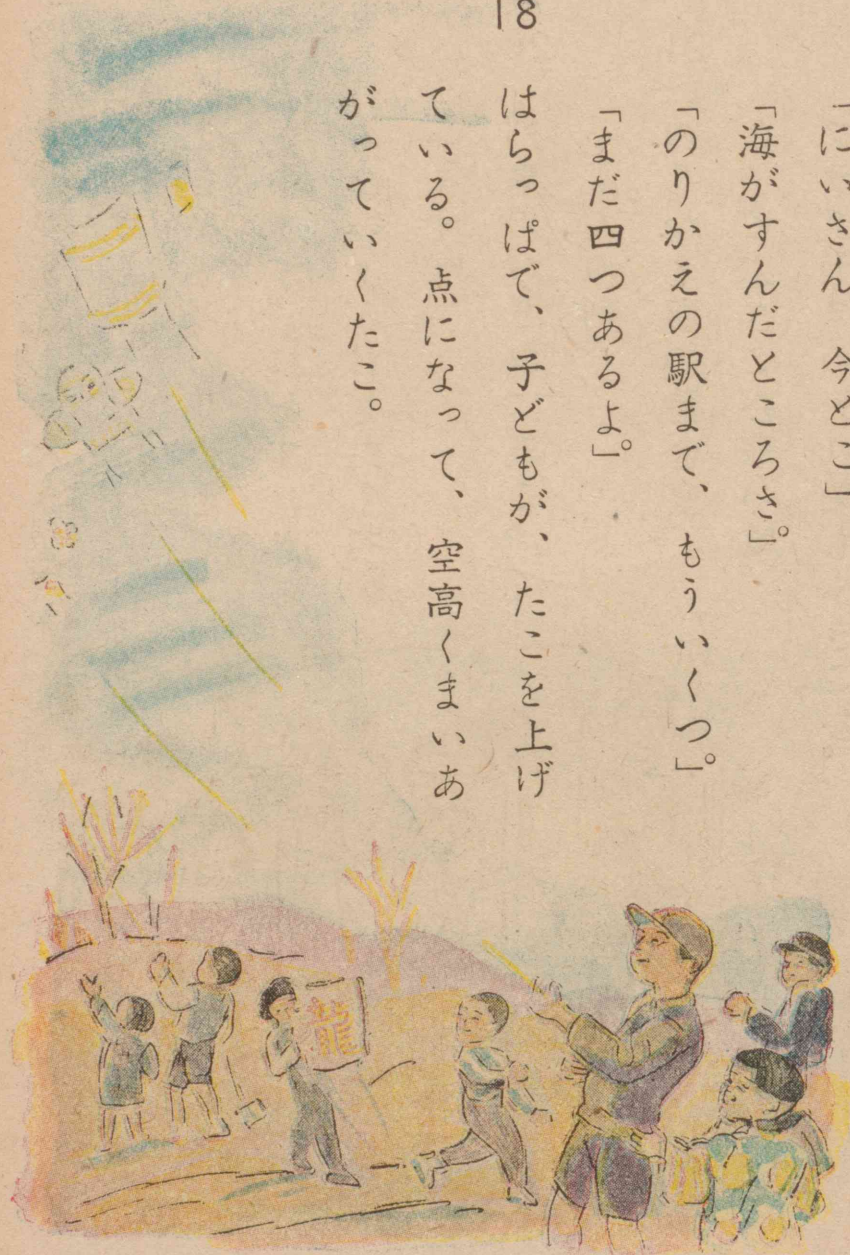
15 わって、いねむりしているおばあさん。
カラン、カラン、カラン。

村のふみきりのぼうがおりる。
ふみきり番のおじさんが、白
はたをふる。村の子どもが、
手をふっている。荷車をひい
た馬が、首をのばす。

16 いねむりしているようこの
ひざから、本がすべりおちる。
17 ガタンという汽車の強いゆれに、
目をあけた、ようこのとぼけがお。



「にいさん、今どこ。」
「海がすんだところさ。」
「のりかえの駅まで、もういくつ。」
「まだ四つあるよ。」
18 はらっぱで、子どもが、たこを上げ
ている。点になって、空高くまいあ
がっていくたこ。



19 車しようさんの大きな声。

「みなさん。

まもなく、のりかえでございます。おわすれものないようおしたくねがいます。」

20 列車のおり口に集まって

いく人の列。

21 のりかえ駅の待合室。

さつとふきこむ寒い風。

プラタナスのかれ葉もふきこむ。



22 オーバーのえりをたてて、

ふるえがおのおじいさん。

23 発車のベル。汽てき。

はげしいじょうき。

黒い石炭のけむり。

24 ぽっかりあいた

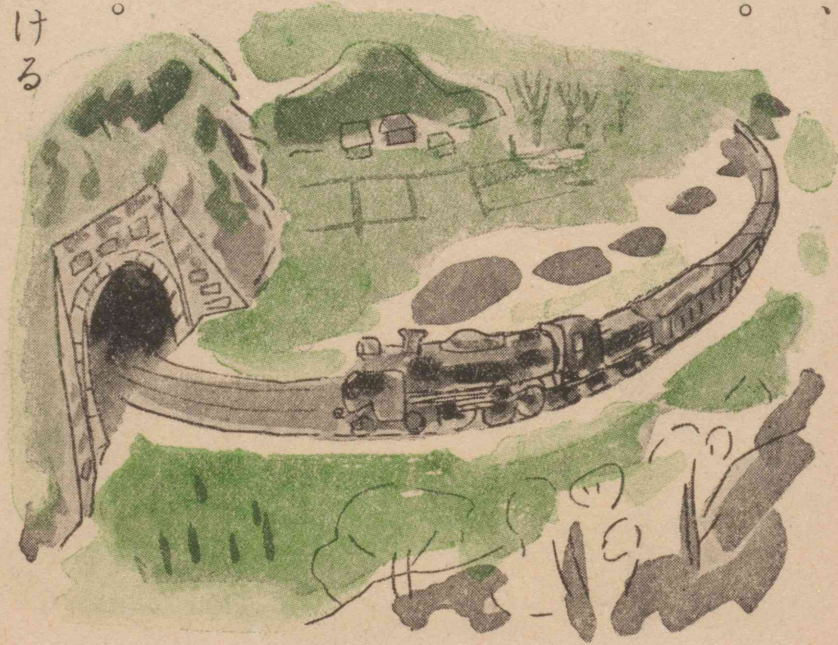
トンネルの口。

電とうがともる。

ゴー。

25 汽車がトンネルにはいる。

トンネルの出口からひらける



26

ひろいたんぼ。そのまん中を流れる川が白く続く。

とりのこされたかきの実が赤い。かきの実をつついていたからすが、びっくりしてとびさる。

27

高い山、ひくい山がかさなって見える。遠くの山のいただきが白い。ようこが「あっ、雪の山」という。

28

じょうきの音、しだいに弱まる。汽車のはやさもおそくなる。シグナルの柱が、大きくゆっくり後にさる。



29

駅につく。

プラットホームに、ひろしくんが立っている。

ようこがまどから手をふる。

ぼくもふる。

ひろしくんも手をふりふり

かけてくる。



(三) 牛の赤ちゃん

「ひろし、早くおいで。」
という、おとうさんの声が、牛小屋の方からした。

ぼくはねまきのままかけだした。

「しっ、しずかに。」

とおっしゃる、おとうさんのそでの下から、ぼくは牛小屋の中をのぞいた。

中は暗くて、よく見えなかったが、すみの方に、小さい黒いものが、かすかに動いているような気がした。

「あっ、牛の赤ちゃん。」

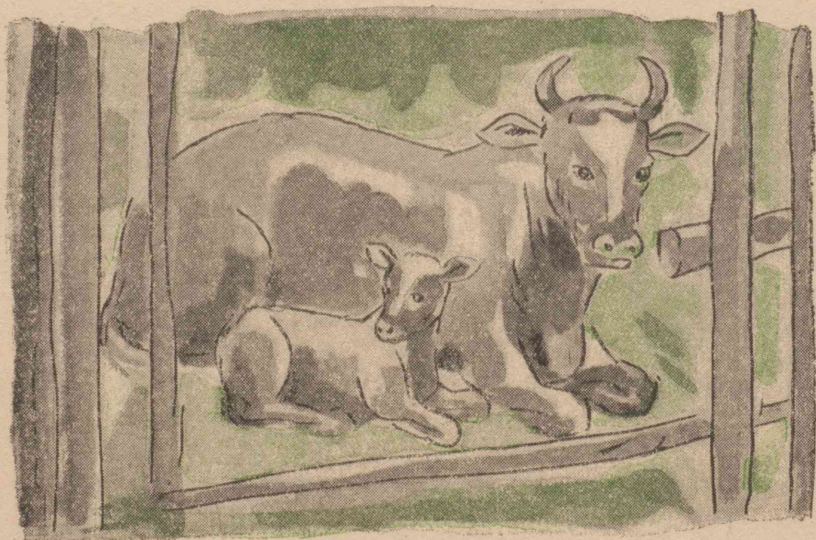
とぼくがさけぶと、おとうさんは、

「ついさっき生まれたところだよ。」

とおっしゃった。

おとうさんの横にいらっしやうたばくろうさんが、かいちゅう電とうをつけて、天じょうから、しだいに下の牛のいる方へてらしてくださった。

黒い毛の赤ちゃんだ。



親牛は、赤ちゃんにぴったりよりそって、ねそべったまま、その大きなしたで、さかんに赤ちゃんのかからだをなめている。そのたびに、牛の赤ちゃんは、からだをびくびくと動かす。赤ちゃんの毛がぬれて光っている。

ときどき、小さなまるい頭をもちあげて、きよときよとあたりを見まわす。ぼくは、生まれたばかりなのに、目が見えるのかと思った。

からだににあわず、大きな耳をしている。横にぴんとはっているのが、おかしくてかわいい。

しばらく見ていると、牛の赤ちゃんは、頭をぐつとあげたかと思うと、両足をつっぱって立ちあがった。それといっ

しよに、親牛も立って、赤ちゃんの方をじっと見ている。

牛の赤ちゃんは、しばらく立っていたが、おなかのあたりをびくびくと動かして、よちよちと、二三步歩きたした。ぼくは思わず、

「歩いた、歩いた。しっかり、しっかり。」

と、大きな声を出してしまった。そうして、知らない間にこぶしをかたくにぎりしめていた。

しかと同じくらいの大ききだ。

牛の赤ちゃんは、立ちどまったかと思うと、くずれるようにしてすわってしまった。そうして、目を細くして、おなかを小さきぎみに、はげしく波うたせはじめた。親牛もま

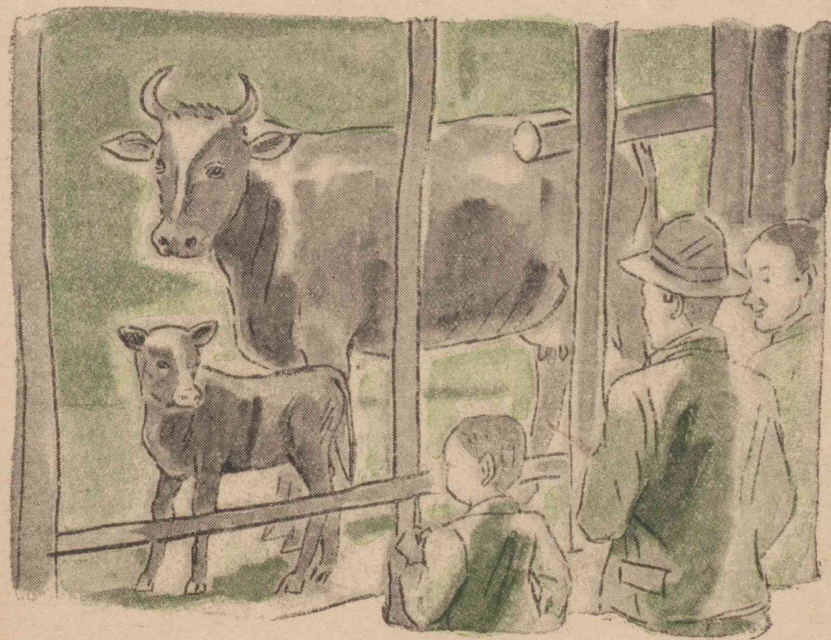
た、その横にすわって、赤ちゃん
の首をなめはじめた。ぼ
くは、赤ちゃんが弱ったの
ではないかと、しんぱい
なりだした。

ばくろうさんは、おとう
さんに、

「もうだいじょうぶです。

それでは、また見にきま
す。」

と、帰っていかれた。



ぼくとおとうさんとは、そののち、しばらくようすを見
ていたが、牛の赤ちゃんは、目をとじてねてしまった。お
なかの波うちが、しだいにしずまってきた。

親牛は、ときどき、長いおを赤ちゃんからだにふりか
けている。

おとうさんが、

「もう安心だ。これでかぞくが、またひとりふえたこと
になるよ。」

と、いって、にっこりなされた。

そうして、そっと、牛小屋の戸をおしめになった。

戸には、赤ちゃんの生まれた、きょうの日づけがチョー

クで書いてあった。

外はもうすっかり夜が明けていた。

学校へ行っても、牛の赤ちゃんのことばかりが気になった。

家に帰ると、いちもくさんに牛小屋へ走っていった。牛小屋の中がわには、むしろがかけてあった。牛小屋の中はむっとして、あたたかかった。

ぼくがむしろをあげようとする、親牛が、角をつき出してやってきた。ぼくはびっくりして、後へとび下がったが、親牛は頭を下げ、角を前に出したまま、じっと身がまえている。ぼくは、親牛が一生けんめい赤ちゃんをまもっ

ていることがわかった。

そこで、ぼくは少しはなれて、牛の赤ちゃんをのぞいて見た。

牛の赤ちゃんは、牛小屋の一ばん暗いすみで、きよとんとしてぼくの方を見ている。よく見ると、かわいい口もとに、白いものをつけている。ちちをのんだのにちがいない。

ぼくが、「こい、こい」といって手まねきしても、赤ちゃんは、知らぬ顔をしている。ぼくが何かするたびに、親牛は角を下げて身がまえる。

ぼくは、しかたがないので、戸をしめて外に出た。外はひやりとして寒かった。

家の中では、おかあさんが、大きななべに、麦をたいて
いらっしやうた。ぼくがそばに行くとき、おかあさんは、
「こんやは、牛もうれしいこと
でしょう。おいわいのごちそ
うだもの。」
と、おわらいになった。
麦のゆげが、なまぬるくかお
にかかって、あまいにおいが鼻
をくすぐる。



四 光の星

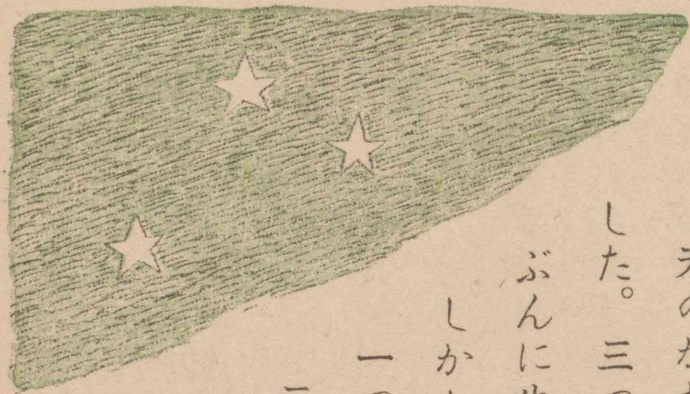
(一) 光の星

天のかわらの川べりに、三つの星がならんでいま
した。三つとも、おなじ月の、おなじ日の、同じじ
ぶんに生まれた星でありました。

しかし、それぞれちがっていました。

一つの星は赤でした。一つは青でした。また、
三つめの星は、一ばん小さくて、色もまる
でないような弱い光でありました。

日がくれかかると、三つの星は、もち
まえの場所にすわって、光りだすの

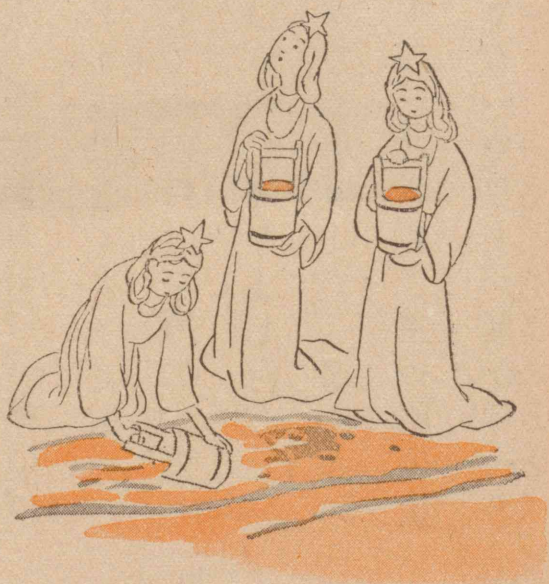


でありました。しかし、光りだす前に、たった一つしなければならないしごとがありました。天の川から、あしたの朝にたくお米の水を、その前の日の夕方に、くみとることでありました。もしも、夜中におもいがけない雨がふって、天のかわらのきれいな水がにごるかもしれないからでありました。

ある夕方でありました。三つの星は、水をくもうと、手に手をおけをかかえて、かわらの岸に出かけました。ちょうど、夕日がしずんだばかりで、まっかな雲が、水の上うつつていました。三つの星は、岸にならんで立ったまま、しばらく、空の夕やけや、水にうかんだ雲の色をながめて

いました。

それから、しずかに手おけを入れて、かわらの水をくみとりました。空のまっかな夕やけは、おけの水にもうつりました。



「まあ、きれいだわ。」

「ほんとによ。あらまた、雲
がもえだしてよ。」

「わたしのにも。」



三つの星は、こういいあって、川べりをはなれました。
めいめい、おけの中をのぞきながら、だんだんと家の方
に近づく間に、夕やけはうすれかかって、それといっしょ
に、おけの中から、美しい雲はきえてしまいました。

けれど、それがきえるにつれて、暗くなるおけの水には、
だんだんと、光をましていくものがありました。それは、
その星の顔でありました。かかえているおけをのぞくと、
自分の顔が一つずつ、うつっているのでありました。

赤い星の手おけには、赤い星がうつりました。青い星の
手おけには、青い星がうつりました。けれど、三つめの星
のおけには、光がまるでないような、さびしい星がうつり
ました。

「まあ、ごらん。わたしの顔はサファイヤのようね。」

「あら、そう。わたしはルビーそっくりよ。」

二つの星は、かたをならべて、うれしそうに話しながら
行きました。だが、三つめの星だけは、うしろからだまっ
てついていきました。

まもなく、道のわかれるところに、一本の古い木が立っ
ていました。



そこからは、家もまぢかでありましたが、そこまで来ると、ふと、木の根もとに、何かしら動くものがありました。黒いものでありました。二つの星は立ちどまりました。

三つめの星も足をとめました。

「あら、かきさきよ、こんなところに。」

「まあ、どうしたのかしら。」

赤と青との星は、手おけをむねにかかえたまま、首をのばしてのぞきました。かきさきは、横にたおれて、目をじっとじていました。よく見ると、からだはどろにまみれていました。

「まあ、きたないわ、どろだらけ。」

「ほんとに、どうしたのかしら。」

かきさきは生きていました。よごれたからだを地べたにつけて、二つの足を動かしました。

「かわいそうだけど……。」

「しかたがないわ。」

と、青い星がいいました。

三つめの星は、だまってかきさきを見ていましたが、いきました。

「わたし、あらってあげますわ。」

「でもそれは、あしたの水じゃありませんか。」
と、赤い星がいいました。

「ほんとうよ。およしなさい。」

青い星がいました。

三つめの星はしかし、そのかささぎに近づいて、手おけを下におきました。



「こんなにはねがよごれていますわ。これでは、いくら飛びたくても飛べないわ。」

赤い星と青い星とは、だまっ
て顔を見あわせました。

そこらは暗くなりました。

星の光は、いっそう明かるくなりました。青い星はそれに気がついて、いっときも早く帰って、自分の場所にすわりたい、そして、だれにも負けないうように光りたいと思いました。赤い星もそう思いました。青い星にいました。

「じゃ、わたくしたち行きましょうか。」

「そうしましょう。それじゃ、お先に。」

そういって二つの星は、急いで行ってしまいました。

三つめの星は、そこにのこされて、

「まあ、こんなところまでどろがいったかい。」

と、ひとりごとをいいながら、まず、かささぎのまぶちのどろを、手でなでて、しずかにあらってやりました。

かささぎは起きかえって、目をぱちりとあけました。同時に、そこから金色の細い光がさしました。三つめの星は、たいそうおどろいて、その目をじっと見てみると、だんだんと光は強くなりました。かささぎは、ばさばさとはねをならして、飛んでいく身がまえをして、ひと声、高く鳴きました。うれしそうに鳴きました。

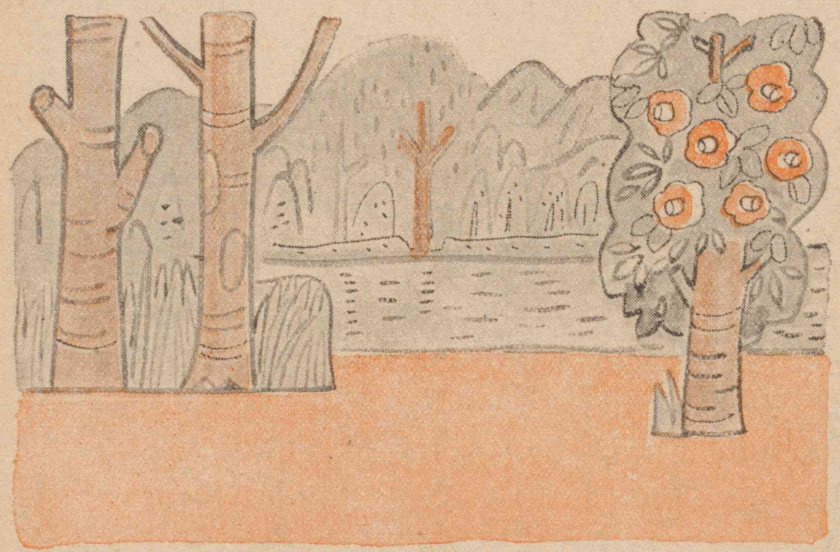
「さようなら、かささぎさん。気をつけて飛んでおいで。」と、星は声をかけました。

かささぎはいなくなりました。もう、まっ暗になっていました。けれども、三つめの星は、また、水をくんでこなければなりません。手おけをかかえて、道を急いで、天の

川のおちにきました。

広い広い川べりには、もう、水をくもうとしている者もいませんでした。そこらは、ただひっそりとしていました。三つめの星は、暗い足もとに気をつけながら、うでをのばして、おけいっぱい川の水をくみました。そして、足を急ぎましたが、しばらくきたころ、ふと、気がつくど、手おけの中に、金色の大きな星が、ぴかぴかと、ゆれていました。「あらっ。」と、思わず声をたてて、三つめの星は、立ちどまって、空の方を見上げました。どこに、そんなりっぱな星が出ているのか、ふしぎに思っ、見まわしましたが、どこにも、見あたりませんでした。

見あたるはずがありません。そのみごとな星こそ 自分自身
 身でありました。そのまぶしい星の光こそ、三つめの星の
 光でありました。
 そして、それ
 こそ、顔の光で
 はなくて、ほん
 とうの心の光で
 ありました。
 みなさん、夜
 になったら星の光を見てごらんさい。たくさん光る星の
 間に、その星も光っているでしょう。



(二) 金のおの銀のおの

出てくるもの

きこりー きこり二
 うぐいす 水の女神

一の場面

やぶかげからうぐいすの声。
 ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、
 ホーホケキヨー。
 きこりー、おのを持って出る。

きこりー 「おや、うぐいすが鳴いている。もう春がやってきたのかな。

うぐいすは、どこで鳴いているのだろう。よんでみよう。ホーホケキョー」。

うぐいす 「ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ。」

ああ、きこりさん。おはようございます」。

きこりー 「おや、うぐいすさん。そんなところにいたの。

おはよう。山はもう春だね」。

うぐいす 「ええ、そうです。ごらんささい。つばきが、もう花をさかせましたよ」。

きこりー 「きれいだね。山はまた美しく、にぎやかになっ

てくるね。これから、毎日、あなたのきれいな声が聞けるから、楽しみますよ」。

うぐいす 「わたしだって、きこりさんの元気な声が聞けるからうれしいわ」。

きこりー 「さあ、それでは、ひとしごとしようかな」。

うぐいす 「わたしも、里へ、春を知らせにまいりますよ」。



きこりー

「きこりさん、きようなら。」
「さようなら。」

きこりー、手をかざして、あたりの木を見ま
わし、池のふちに近づく。

きこりー

「あ、ここにいい木がある。この木を切りたお
そう。」

えいこらさ、

えいこらさ。

あつ、しまった。」

おのが池の中におちる。きこりー、しょんぼ

りと、池のふちに立つ。

きこりー

「一つしかないだいなおのを、池の中におとし
てしまった。こまったことになった。」

あのおのがないと、しごとができない。

どうしたらいいだろう。

ああ、こまったなあ。」

頭をさげて、しゃがみこむ。その時、水の女
神が後にあらわれる。

水の女神

「もしもし、もしもし。」

きこりー

「あつ、あなたは。」

水の女神

「私は、この池にすんでいるものでございます。」

どうしてあなたは、そんなになしそなたを
していらっしゃいますか。

きこりー 「はい。一つしかないおのを、この池の中におと
してしまったのです。」

水の女神 「それは、おきのどくでございませう。私がさがし
てまいりませう。」

女神、池の中にきえたかと思うと、金のおの
を持ってあらわれる。

水の女神 「これでございませうか。」

きこりー 「いいえ、いいえ。そんなりっぱなものではござ
いません。」

水の女神 「それでは、もう一度

さがしてまいります。」

こんどは、銀のお
のを持ってあらわ
れる。

水の女神 「これではございませ
んか。」

きこりー 「いいえ、いいえ。そ
んなりっぱなもの
はございません。」

水の女神 「では、もう一度さが



してまいりましょう。」

こんどは鉄のおのを持ってあらわれる。

水の女神 「これでごぎいますか。」

きこりー 「あつ、それです。それが私のおのでごぎいます。

ありがとうございます。」

うれしそうに、鉄のおのを受け取る。

水の女神 「ちよつとお待ちください。」

金、銀のおのを持ってあらわれる。

水の女神 「あなたは、なんという、しようじきなお方でご

ぎいましょう。この金と銀のおのも、さしあげ

ますから、お持ちになつてください。」

きこりー 「いいえ、いいえ。そんなりっぱなおのを、いた

だくわけにはまいりません。」

女神、池の中にきえていく。

きこりー 「おや、今のお方は、神様だったのか。」

女神様、女神様。」

池の中をのぞきこみながら、三つのおのをい
ただく。

二の場面

きこり二が、大声をはりあげながら、右手からやつ
てくる。

きこりニ 「となりのきこりは、いいおのをもらったなあ。
なあに、わたしはもっといいのを、もらってこ
よう。」

うぐいす 「ケキヨ、ケキヨ。」

きこりニ 「なんだ。うぐいすか。」

うぐいす 「なにをそんなにあわてているのですか。」

きこりニ 「いいことがあるのだよ。」

うぐいす 「どんないいことがあるの。いつもだったら、お

きこりニ 「そんなことは、どうでもいいよ。それより、こ

のへんに池はないかね。」

うぐいす 「池だったら、もうすぐよ。」

きこりニ 「うぐいす、とんでいく。」

きこりニ 「大急ぎで池の方へ行く。」

きこりニ 「この池だな。よし、よし。木を切るまねをして
やろう。」

えいこらぎ、

えいこらぎ。

あっ、しまった。

わぎと、おのを

池の中へなげこむ。

きこりニ 「たいへんだ、たいへんだ。」



わたしのだいな、一つしかないおのを、池の中におとしてしまった。おのがない、おのがない。ああん、ああん。

池のふちで、大声をあげてなきさわぐ。そこへ水の女神があらわれる。

水の女神

「あら、どうなさったのでございますか。」

きこりニ

「はい、はい。——ああん、ああん。」

水の女神

「ないていてはわかりません。」

きこりニ

「それでは、もうしあげます。木を切っていて、だいなおのを、この池の中におとしてしまったのです。ああん、ああん。」

水の女神

「それはおきのどくでございます。います。私が、池の中にはいって、さがしてまいりますしょう。」

きこりニ

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

女神、池の中から、鉄のおのを持ってくる。

水の女神

「これでございますか。」

きこりニ、きよとんととして、



きこりニ

「いいえ、いいえ。そんなものではございません。もっともっと、いいのでございます。」

きこりニ、こんどこそはというような顔をしてにこにこする。女神、こんどは、銀のおのを持ってくる。

水の女神

「これではございませんか。」

きこりニ

「いいえ、いいえ。そんなものではございません。もっとよく光った、いいおのでございます。」

水の女神

「それでは、もう一どさがしてまいります。」
こんどは金のおのを持ってくる。

水の女神

「これでございますか。」

きこりニ

「はい、はい。」

それでございます。

あった、あった。

それが私のおのでございます。ありがとうございます。ございました。」

金のおのを受け取る
うとする。

水の女神

「ちょっとお待ちになつて。これは、あなたにさしあげるわけにはま



いりません。」

きこりニ 「おや、おや。どうしてでございますか。それでは銀のおのをください。」

水の女神 「銀のおのは、あなたのものではないと、おっしゃったではありませんか。」

きこりニ 「それでは、鉄のおのでけっこうです。」

水の女神 「鉄のおのは、池のそこにしずんでいます。じぶんでおさがしになったらいいでしょう。」

女神、きえる。

きこりニ 「ああ、ああ。それはあんまりだ。ああん、ああん。なきながら帰っていく。」

五 私のけいこ

一 いろいろんな文

私たちは、いろいろんなことを見たり、聞いたり、話したり、考えたりします。これをいろいろんな形の文に書いてみましょう。

○「かべ新聞」を読んで、その中に、どんな文があるかしらべてごらんなさい。

○私たちも、かべ新聞や文しゅう（いろいろんな文を集めて作った本）を作りましょう。

○つぎのようなことをもとにして童話を作りましょう。

・「いつ、どこで、だれが、なにを、どうして、どうなったか」を考える。

・学校や家でのできごと、道で見たこと、聞いたこと、本で読んだこと、えいがやげきのことから思いつく。

・読んだ話のつづきを考えて書いてみる。

○研究したことは、どんなにまとめたいでしょう。

研究の思いつき、しらべ方、しらべたことがら、研究のあと、じぶんで気のついたことや思ったこと、研究でこまったことやうれしかったこと。

二

じぶんで思ったこと

あなたは、本を読んだり話を聞くだけでは、きっとものたりないと思うでしょう。あなたは、本を読んだあと、どんなことを思っていますか。人の話を聞いて、どんなことを思っていますか。じぶんで思ったことをノートに書きましよう。

○どんなことを書いたらいいでしょう。

・こんな人やものが出る。その人やものが話したり、したりすることを、私はこんなに思う。

・こんなできごとがおこる。そのできごとについて、私はこんなに思う。

・本を読んでいると、こんなに感じた。

どこが、おもしろかった、楽しかった、うれしかった、かなしかった、美しかった、いやだったなど。

・こんなことが思いだされた。

・こんなことに、はじめて気がついた。

○じぶんで思ったことは、友だちと話しあって、友だちの思ったこととくらべましょう。友だちの話についても、思ったことをどしどしのべましょう。

よいと思ったこと、へんだと思ったこと、ふしぎに思ったこと、たりないところ、まちがったところ。

三 ことづけ

きよしくんの組では、きょう、午前の学習のよういができていない人がありました。それは、あきらくんが、先生のことづけを聞きまちがえて、友だちにつたえたからでした。あなたがたも、ことづけをすることがあるでしょう。

先生からうちの人へ うちの人から先生へ

先生のおつかい うちでのおつかいなど

ことづけを、わすれたりまちがえたりすると、じぶんばかりでなく、ほかの人にもめいわくがかかります。

○友だちと、ことづけあそびをしてみましょう。十五六人集まって一列にならびます。先頭の人が、ひとりで、

すきなことばをきめて、となりの人の耳に、こっそり
つたえます。人に聞かれてはいけません。

こうして、おわりの人までつたえると、はじめのこと
ばは、どうなっていくでしょう。

○おつかいに行くとき、前に「たいせつなお話」でけい
こをしたように、紙にたいせつなことを、書いていっ
てごらんなきい。

四 くわしく書く

「牛の赤ちゃん」を読んでごらんなきい。

ひろしくんは、どんなものを、どんなじゆんに見ていった
でしょう。また、それをどんなじゆんじよで書いています
か、よくしらべましょう。

○あなたも、つぎのことを、じゆんじよをたてて、くわ
しく、長く書いてごらんなきい。

朝から晩まで、見たえいがやげき、えんそく、
学校へきてから帰るまで、魚つり、おてつだい。

きよしくんは、「うちのやぎ」というだいで書いてみま
した。やぎが草をたべているようすを書きました。白いひ
げについても書きました。かわいい目のことも書きました。
そのなき声についても書きました。歩いていくようすも書
きました。あたりのけしきのこと書きました。そうする

うちに、やぎのくわしい文ができました。

○あなたも一つのものについて、いろいろなところからよく見て、くわしい文を書いてごらんなさい。

五 新しいかなづかい

みなさんが、古い本を読んでいると、たとえば、

かわいいおんなの子が、おうむと話をしている。

と、書いてある時と、

かはいいをんなの子があうむと話をしている。

と、書いてある時とがあるのに、気がつくでしょう。

ことばをかなで書きあらわすことを、かなづかいとい

ますが、前の方が、新しいかなづかいで、あの方の方がふる
いかなづかいです。古いかなづかいでは、

は || わ を || お あう || おう あ || い

上のように書いて、下のようにいいました。これはむかし、
ことばの書き方をきめたころには、「は」を「は」、「を」
を「を」、「あう」を「あう」といったからです。

ところが、そののち長い間に、「は」を「わ」、「を」を
「お」、「あう」を「おう」というようないい方にかわって
きました。むかしは、「あさがほ」というと「あさがほ」
と書きました。「かへる」というと「かへる」と書きまし
た。それがいつのまにか、「あさがお」というようになり

ました。

むかしの人は、ことばを話すとおりに書きました。それがだんだんとかわってきて、話すことばと書くことばのあらわし方が、かわってきたのです。

それで、今では、ことばを書くときには、話すとおりに書くようにきまりました。しかし「本は」の「は」、「本屋へ」の「へ」、「本を」の「を」は、前どおりに「は」「へ」「を」と書くようになっていきます。そのほかは、だいたい新しいかなづかいになるようになりました。

○つぎのことばは、どんなに書いたらいいでしょう。
てふてふ けふ いへ ぎふきん ぶだう みづ

六 かん字を書くじゆんじよ

かん字には、だいたい書くじゆんじよがきまっています。

受 — 一ッ 又 起 — 走 己

晩 — 日カロム 楽 — 日ンク 木

○いろいろなかん字の書くじゆんじよをしらべて、書いてごらんさい。

○これまでにならったかん字を、じゆんじよよく書くけいこをしましょう。

かん字は、じゆんじよ正しく書くとき、形もきれいに書けるし、早く書くこともできます。かん字をならう時は、はじめに、正しくおぼえて書くことがたいせつです。

七

「げき」を作ろう

「金のおの銀のおの」に出てくる、きこり一、二は、そののちどうなったことでしょう。こんなにも考えられます。

きこり一は、きこり二の話を聞いて気のどくに思い、銀のおのをきこり二にわけてやりました。きこり二はたいそうよろこんで、いい人になりました。それから、ふたりのきこりは、いつもなかよく山へ木を切りに行きました。

あなたもいろいろと考えて、三の場面を「げき」に作ってごらん下さい。そうして、「げき」の文(台本)を書きましよう。

○どんなことを、「げき」にしたらいいでしょう。

・よんだ童話や物語。 ・学校や家であった、ほんとうのできごと。 ・知っている「げき」を作りかえる。

○いろいろな「げき」の台本を書いてみましょう。

・話のすじを読みとって、出てくるものをきめる。
・場面をきめる。 ・出てくるものの役や話すこと(せりふ)を考える。 ・出てくるものの持ちもの、ふくそう、しせい、身ぶりを考えて書きそえる。

○「げき」の台本が書けたら、友だちと「げき」をやってみましよう。

新しいことば

アイロン……………23
 あしもと……………63
 あたたまる……………42
 あに……………22
 あね……………23
 あぶく……………66
 あぶら……………62
 あまい……………92
 いじわる……………39
 いそ……………74
 イソップ……………27
 いなた……………22
 いる……………75
 インク……………8
 うずまき……………62
 うんど……………70
 えのぐ……………65

おおつた……………75
 おどつて……………31
 おどな……………8
 おの……………105
 おもいがけない……………94
 おもうぞんぶん……………39
 がいがん……………75
 かいじょう……………75
 かいで……………8
 かえつて……………30
 かかえて……………94
 かきもち……………45
 かこまれて……………50
 かささぎ……………98
 かずのこ……………45
 かぞく……………89
 かつてな……………59
 カット……………17
 からす……………82
 かわべり……………93
 かんたんけい……………43

かんなくず……………63
 かんぴょう……………46
 きこり……………105
 きりぼし……………46
 くしがき……………71
 くちごたえ……………33
 くみ(どる)……………94
 くやし……………34
 くれかかる……………93
 クロスワード……………24
 けつこう……………120
 (に)けん……………7
 けんきゅう……………14
 けんき……………68
 こうしゃ……………20
 こうつうあんぜん……………20
 しがね……………21
 しゅうかん……………22
 こきぎみ……………87

こぶし……………87
 こんや……………92
 さくぶん……………13
 さぎんか……………64
 さしかかる……………48
 さと……………107
 サファイヤ……………97
 ぎぶどん……………44
 ぎんねん……………28
 ぎんま……………62
 (ひとつ)しか……………109
 しかし……………4
 じかん……………10
 シグナル……………82
 (じぶん)じしん……………104
 した……………86
 しいに……………82
 したく……………80
 しぶき……………74
 じべた……………99

じまん……………31
 じょうぎ……………81
 しらかべ……………76
 しらなみ……………75
 しらほ……………75
 すいぎん……………43
 すいぶん……………47
 すがすがしく……………8
 すず……………26
 (みみを)すまして……………57
 すりもの……………8
 すわつて……………78
 せきたん……………81
 セルロイド……………40
 せんべい……………45
 せんとう……………125
 そつくり……………97
 そで……………84
 だいくさん……………63

だいこん……………46
 たいひ……………69
 ためいき……………38
 ためて……………38
 ちきゅう……………23
 チューブ……………44
 ちんじゅ……………22
 つくづく……………30
 つけもの……………47
 つた……………29
 つっぱつて……………86
 つばき……………106
 つばやき(ました)……………28
 つゆくさ……………32
 つられて……………18
 つる……………46
 つれだつて……………66
 つれて……………96
 ておけ……………95

へきぎ.....75
 へび.....49
 ほうねん.....22
 ほしがき.....46
 ほしぐさ.....45
 ホスター.....21
 まける.....25
 ましていく.....96
 またいで.....48
 まちあいしつ.....80
 まぶち.....101
 まみれて.....98
 みがまえて.....91
 みけねこ.....34
 みごと.....27
 みすぼらしい.....34
 みずみずしい.....38

みぞれ.....69
 みどれて.....27
 みにくく.....28
 むぎ.....69
 むつと.....90
 めいわく.....125
 めかた.....47
 めがみ.....105
 もち.....45
 もちまえ(の).....93
 もとどおり.....41
 ものほし.....23
 やまびこ.....51
 ゆげ.....69
 ゆれに.....78
 よくばって.....66

よけて.....64
 ルビー.....97
 レール.....74
 ろうか.....19
 わらび.....46

てちょう.....56
 てつぼう.....29
 てまねき.....91
 でんしんばしら.....48
 どうじに.....102
 どうばん.....56
 とくい.....32
 とけ(ます).....26
 とけ.....24
 とじたり.....67
 とびさる.....82
 とぼけ(がお).....78
 ともる.....81
 ながめて.....94
 ななめ.....18
 なまいき.....33
 なまぬるく.....92
 なまり.....75
 なめて.....86

にぎりしめ.....50
 にぐるま.....78
 にし(び).....18
 にもつだい.....7
 ねだって.....52
 ねどこ.....7
 ねまき.....84
 のせて.....11
 ノート.....45
 のべ(あいました).....60
 のりかえ.....79
 ばくろうさん.....85
 はじける.....44
 はず.....104
 (とり)はずして.....13
 はずんだ.....19
 はっしゃ.....81
 はって.....50
 はっぴよう.....14

はみがき.....26
 ばら.....32
 はらっぱ.....79
 はかる.....47
 ひだまり.....76
 ひづけ.....89
 ひっこんで.....40
 ひっそり.....64
 ひでり.....38
 ひどりがと.....28
 ひも.....49
 ひやりと.....91
 ふくびき.....26
 ぶじ.....22
 ふだん.....38
 ふみにじられ.....35
 ふもと.....30
 プラタナス.....80
 プラットホーム.....83
 ふみきり.....78

坂	柱	信	暑	心	感	遊	助	原	浅	息
さか	はしら	しん	あつい	しん	かん	あそぶ	たすける	はら	あさい	いき
50	48	48	44	42	42	40	39	37	31	30
羨	駅	等	寒	島	凶	明	開	何	詩	拾
むぎ	えき	どう	さむい	しま	ず	あかるい	ひらく	なに	し	ひろう
69	69	68	68	65	65	62	60	59	57	54
鉄	里	神	鳴	飛	安	毛	炭	合	点	皮
てつ	さと	かみ	なく	とぶ	あん	け	たん	あい	てん	かわ
112	107	105	102	100	89	86	81	80	79	77
										様
										さま
										113

計	楽	絵	折	服	待	晩	起	受	新
けい	たのしい	え	おる	ふく	まつ	ばん	おきる	うける	しん
12	11	11	7	7	6	5	4	4	4
童	続	表	究	研	品	談	相	期	画
どう	つづく	ひょう	きゅう	けん	ひん	だん	そう	き	かく
16	16	14	14	14	13	13	13	13	12
兄	数	週	軽	帰	西	歌	室	教	終
あに	かず	しゅう	かるい	かえる	にし	うた	しつ	きょう	おわる
22	21	21	19	19	18	18	17	17	17
弱	界	世	語	負	勝	店	植	星	姉
よわい	かい	せ	かたり	まける	かつ	みせ	しょく	ほし	あね
28	28	28	27	25	25	24	24	23	23

かん字

読みかえ

外	後	植	角	来	分	黒	間	新	聞
ほか	のち	うえる	つの	らい	わける	こく	かん	あたらしい	ぶん
42	38	37	27	21	17	16	10	8	4
正	方	同	生	身	明	石	上	教	教
ただしい	かた	どう	しょう	み	あける	せき	あげる	おしえる	おしえる
131	129	102	91	91	90	81	79	75	43

既成の作品から引用したものは次の通りであります。
光の星 浜田広介

監修 編者

奈良女子高等師範学校教授
同附属小学校主事
重松 鷹 泰

編修・執筆

奈良女子高等師範学校教諭
同
同
今井 鑑 三
笹倉 美 好
浜 真喜男

挿画

田川 寛 一
下高原 龍 己

しらすぎ 小学 国語 下 (小学校 国語科 第三学年 後期用)

昭和二十六年 月 日 印刷
昭和二十六年 月 日 発行 定価 金 円
(昭和二十五年八月十二日 文部省検定済)

著作者 大阪書籍国語編修委員会
代表者 重松 鷹 泰

発行者 大阪書籍株式会社
代表者 松村 九兵衛

印刷者 大阪書籍株式会社
代表者 松村 九兵衛

発行所 大阪書籍株式会社
大阪市西成区津守町東二丁目五二番地

小国 330



広島大学図書

広島大学図書

0130449883



大阪書籍株式会社

麻

0

83